

11 月に入り、私が滞在しているオハイオ州フィンドレーでは本格的な冬の訪れを感じるようになりました。気温は一桁から氷点下の日が多く、朝晩は特に冷え込みが厳しくなっています。街はすでに雪が降り始め、木々や屋根が白く覆われ、冬景色が広がっています。日常生活の中でも、厚手のコートや手袋が欠かせなくなり、外を歩くと吐く息が白くなるほどです。こうした環境の変化を通じて、季節の移ろいを肌で感じるとともに、現地の人々が冬を楽しむ工夫や文化にも触れる機会が増えてきました。寒さは厳しいものの、街の雰囲気はどこか暖かく、感謝祭やクリスマスに向けた準備が始まり、華やかな装飾が街を彩っています。このような冬の環境の中で、今月も学業や生活において様々な経験を積むことができましたので、以下に報告致します。

【学習面】

今月も地域の子供たちを対象とした日本文化紹介活動に参加し、異文化交流の意義を改めて感じることができました。特に、Gifted Program と Genki Kids Program の二つの活動は、対象や形式は異なるものの、どちらも「日本文化を体験的に学んでもらう」ことを目的としており、自分自身にとっても大きな学びとなりました。

・ Gifted Program

このプログラムは、ハンコック群教育サービスセンターが才能教育の一環として実施している取り組みで、学力や創造性、芸術的才能などで優れた児童が対象となっています。こうした子供たちは特別な学びの機会として大学を訪れ、通常の授業では得られない体験を通じて視野を広げています。その一環として、私はフィンドレー大学を訪れた小学 5 年生に日本の礼儀について紹介しました。まず、「先生にリスペクトを示すにはどうすればよいか」という問いかけから始め、日本では授業の開始・終了時に必ず挨拶を行い、先生や仲間に敬意を示す文化があることを説明しました。アメリカでは授業の冒頭に先生と生徒がグータッチを交わすなど、よりカジュアルでフレンドリーな雰囲気があるということを子どもたちから聞き、両国の違いを分かりやすく伝えました。さらに日本のお辞儀には「会釈」「敬礼」「最敬礼」の三種類があり、それぞれ日常的な挨拶、改まった場面での挨拶、謝罪や特別な感謝を示す場面で使い分けられることを説明しました。子どもたちには実際に体験してもらい、礼儀の意味を身体で理解してもらうことができました。その後、日本の代表的なスポーツである相撲の歴史について話し、試合の動画を見せるなどして紹介しました。それに続き「とんとん相撲」のゲームを行いました。試合前には必ず「よろしくお願いします」と言い、お辞儀をするように指導し、遊びを通じて礼儀の大切さを学んでもらいました。力士は

事前に折り紙で手作りしたのですが、ぜひ持ち帰りたいと言う子が多く人気でした。子どもたちがとても好奇心旺盛で質問が止まなかったため、プログラム終了後に、予定にはなかった折り紙教室を開催しました。折り紙を通じてさらに日本文化に触れてもらうことができましたと思います。「日本に行ってみたい」「アニメ以外にも日本文化を深く知りたい」「今回のプログラムでこのブースがいちばん楽しかった」という声を多く聞くことができ、自分自身も大きなやりがいを感じました。



・ Genki Kids Program

この授業の最終回では、週に一度日本文化を紹介してきた子どもたちとご家族が参加し、これまで学んできたことを簡単に発表しました。その後、折り紙、ちぎり絵、習字、かるたなどを体験していただき、日本文化の多様な側面に触れてもらいました。折り紙の題材として 千羽鶴の話を取り上げました。千羽鶴は「平和」や「願いの成就」を象徴する折り紙作品であり、病気の回復や幸せを祈る習慣があることを説明すると、ご家族も強い関心を示し、子どもたちと一緒に折り紙を楽しみながら「日本では折り紙にこんな深い意味があるのか」と驚いていました。折り紙が単なる遊びではなく文化的な意味を持つことを理解していただけたことは、大きな成果だったと思います。また、ちぎり絵では日本の象徴である富士山についても紹介しました。富士山は日本で最も高い山であり、古くから信仰や芸術の対象となってきたこと、そして日本人にとって特別な存在であることを伝え、ご家族からは「写真で見たことはあるけれど、文化的な背景は知らなかった」という声が上が、話題が広がりました。子どもたちも「いつか本物を見てみたい」と口にし、ご家族と一緒に盛り上がる場面がありました。私のペアの女の子は、当初はあまり乗り気ではなく参加していましたが、次第に日本文化に興味を持ち、最後には私に日本語も交えた手紙を書いてくれました。その手紙には、「あなたとペアになって一緒に学んでいくうちにこの時間がすごく好きになった。もっと学びたいから次のイベントにも参加したい」と記されており、非常に感動しました。自分の活動が子どもたちやご家族の心に届き、学びの楽しさを共有できたことは、印象深い経験になりました。



・マーケティング課題

English for Specific Purposes for learners of Cognitive Academic Language Proficiency の授業において、「日本の製品をアメリカ市場に売り出すなら何を選ぶか」というマーケティング課題に取り組みました。私は自分の出身地である福井県の伝統工芸品である越前和紙を選び、その独自性と文化的価値をどのようにアメリカで伝えられるかを考えました。和紙は日本文化を象徴する素材であり、単なる和紙としての用途にとどまらず、芸術的・実用的な幅広い可能性を持っていることも私がこの製品を選んだ一つの理由です。課題の中では、和紙は食品保存用のフードボックスに応用するなど、環境にやさしく持続可能性の高い製品として提案しました。アメリカ市場では「エコ」や「サステナビリティ」が重要な価値観となっているため、和紙の自然素材としての強みを活かし、環境意識の高い消費者層をターゲットとする戦略を考えました。さらに、和紙の美しさや手触りの良さを強調し、包装材やインテリア製品として展開する可能性についても検討しました。他の学生もそれぞれ独自の視点から製品を選び、興味深かったです。例えば、日本の銭湯を思わせる香りを取り入れたアロマキャンドルを企画し、癒しやリラクゼーションを重視するアイデアや、日本固有の柄をあしらった傘を提案する学生もあり、伝統的な美意識を日常生活に取り入れる工夫が示されていました。この課題を通じて、単に日本文化を紹介するだけでなく、それをどのように異文化の市場に適応させ、魅力的に伝えるかという視点を学ぶことができました。マーケティングの観点から文化を分析することで、自分自身の表現力や論理的思考力が向上したと感じています。また、和紙という身近な文化資源を題材にしたことで、自分のルーツを再認識し、それを国際的な文脈で活かす意義を強く実感する機会となりました。

【生活面】

・水泳、陸上、バレー、アメフト観戦

今月はキャンパス内外で行われた様々なスポーツイベントを通して、アメリカの大学スポーツ文化の迫力と熱量を改めて感じる機会が多くありました。

まず水泳の大会では、コロンビア出身の友人が 500 メートル自由形で圧倒的な差をつけて優勝し、そのスピードに心から驚かされました。普段は穏やかな印象の彼が、レースになると一気に別人のような力強さを見せ、会場中が沸きました。また、ブラジル出身の友人も見事な泳ぎで 2 位に入り、同じ大学の選手たちが上位を独占する結果となり、チーム全体のレベルの高さを実感しました。

さらに陸上の記録会では、陸上部のメンバーたちが自己ベストの更新を目指して全力で挑む姿を見て、スポーツに対する真摯な姿勢に胸を撃たれました。女子バレーボールの試合では、最後まで点を競り合う白熱した展開で惜しくも敗れたものの、選手たちのチームワークと粘り強さが印象に残りました。

そして大きなイベントとしては、大学のアメリカンフットボールの試合を観戦しました。NCAA NATIONAL PLAYOFFS ROUND ONE、ミネソタ大学との全国大会一回戦という特

別な試合で、スタジアムの熱気と迫力はいつも以上でした。

その日は試合前からスタジアムのそばの広い芝生のスペースには、マーチングバンド部の家族やアメフト選手の親御さんたちが集まり、テーブルいっぱいを持ち寄ったパンケーキ、サンドイッチ、ハンバーガー、フルーツなどをまるでお祭りの屋台のように自由に配っていたのがとても印象的でした。これがいわゆる「テールゲート文化」なのだと知り、まさに“The America”を体験した気分でした。特に私の友達のお父さんは、サンタクロースの格好で食べ物を配っていて、子どもから大人まで次々と話しかけられ、大人気でした。その明るく温かい雰囲気に触れ、スポーツを中心にコミュニティ全体が一体となるアメリカらしさを強く感じました。

試合自体は惜しくも敗れてしまいましたが、学生アスリートとは思えないほど高度なプレーが次々と展開され、まさに「本場のアメフト」を全身で味わうことができました。

こうしたスポーツ観戦を通して、学生生活の中に根付くスポーツ文化の豊かさを知り、外で体を動かす機会が減っていく冬の訪れを少し寂しく感じています。



・美術館、植物園、劇場、での文化体験

スポーツだけでなく、文化施設を巡ることでアメリカの芸術にも触れる機会が多くありました。

Columbus Museum of Art（コロンバス美術館）は、アメリカ印象派やモダンアートの作品で知られ、ジョージア・オキーフやエドワード・ホッパーなどの代表作を所蔵しています。私が訪れた際にはチョークアート展示もあり、子どもから大人まで楽しめる雰囲気でした。私は高校時代、世界史専攻だったこともあり、教科書や資料集で見たことのある作品を沢山肉眼で見ることができてとても感動しました。展示の幅が広く、作品の解説も丁寧で、気づくと3時間も滞在していたほど魅力的な美術館でした。



Phipps Conservatory（フィップス温室・植物園）は1893年に実業家ヘンリー・W によっ

て創設された、全米でも屈指の歴史を持つ温室施設で、私がネットで観光地をリサーチしていた際にぜひ行きたいと思っていた植物園の一つです。「自然を通して地域に人々を豊かにする」という理念のもとに開かれ、120 年以上にわたりピッツバーグの象徴的な文化施設として親しまれてきました。館内にはヴィクトリア様式の大温室を中心に、季節ごとの植物展示やアート作品が融合する空間が広がっており、その美しさと環境への取り組みが高く評価されています。特に、持続可能な建築と運営方針が世界的にも注目されており、LEED 認証をはじめ、環境デザインに関する様々な賞を受賞してきました。植物園としてだけでなく、「世界で最も環境にやさしい施設のひとつ」とも言われるほどです。

私は 11 月末に訪れたため、ちょうどクリスマス展示が始まっており、館内は一足早くホリデーシーズンの雰囲気になっていました。エリアごとにテーマの異なるクリスマスツリーやオーナメントが置かれ、華やかな装飾と植物が見事に融合していて、歩くだけで胸が高鳴るような空間でした。ガラス細工と植物の融合、ポインセチアが鮮やかに敷き詰められた部屋など、どこを見ても趣向が凝らされていて、まるでクリスマスの世界を旅しているような気分を味わうことができました。

特に印象的だったブースのひとつとして、日本庭園の展示もありました。小さな池が設けられ、その中には鮮やかな色をした鯉が泳いでおり、訪れた人々が静かに眺めて楽しんでいました。池の周りには苔や小石、ミニチュアの灯籠や橋が配置され、静謐な和の雰囲気が漂っていました。クリスマスの装飾が華やかな中で、このブースは落ち着いた趣があり、光やオーナメントの反射で鯉や庭園の小道がキラキラと輝くのがとても幻想的でした。また、この時期は多くの来場者で賑わうようで、友達のお母さんが事前にチケットを予約してくださったおかげで、ほとんど並ばずに入館することができました。もし予約が無ければ、外の歩道まで行列が伸び、21 時過ぎまで待つほどの大混雑でした。このことから、Phipps のクリスマス展示が地元の人々にとっても非常に人気が高く、毎年多くの人を惹きつける特別なイベントであることがよくわかりました。



さらに Benedum Center ではミュージカル『Les Misérables』を鑑賞しました。ブロードウェイ経験者を含むキャストによる力強い歌声、最先端の舞台技術を駆使した照明やプロジェクションマッピングによる演出が圧巻で、まさに作品の世界に引き込まれました。イギリス英語でスピードも速く聞き取りは難しかったものの、様々な角度から楽しめる非常に

完成度の高い舞台でした。劇場内の豪華さも印象的で、まるでオペラ座に迷い込んだかのような気分になりました。



・ Thanksgiving

11月の大きな文化行事である Thanksgiving（感謝祭）は毎年11月の第4木曜日に祝われ、家族や親しい人と一緒に過ごす日としてアメリカ人文化に深く根付いています。

私は友人の実家がある Pittsburgh（ピッツバーグ）に招待していただき、数日間ホームステイを経験しました。彼女は日本文化に興味があり、アニメや行事について話が弾み、私ももっと詳しく学びたいと感じる楽しい時間でした。Thanksgiving 当日は、友人の祖母宅に親族が勢揃いし、ターキー、パンプキンパイ、クランベリーなど Thanksgiving に欠かせない料理はもちろん、伝統料理や家庭独自のアレンジ料理が並び、さらにお母さまのお誕生日もお祝いするなど、温かい雰囲気の中で心温まるひとときを過ごしました。

Thanksgiving 最終日（11月30日）には、友人が幼い頃から通っている地元の教会に足を運びました。驚いたのは、教会内の椅子や装飾品がすべて紫色で統一されていたことです。紫はキリスト教において王族や権威、悔い改めや祈りの期間を象徴する色とされ、特にクリスマスに向けた準備期間である Advent（待降節）では祭壇や聖具に用いられます。11月最終日曜日はクリスマスに向けて心を整える特別な日とされ、信者たちが祈りを捧げます。私も教会の利用者の方々と共に静かに祈りを捧げ、宗教的な落ち着きと共同体の温かさを感じる貴重な体験となりました。



11 月は、スポーツ観戦や文化施設の見学、ホームステイを通して、アメリカの大学生活や地域文化、伝統行事に触れることができ、非常に充実した一か月となりました。特に、学生アスリートの活躍や、クリスマス展示やミュージカルの迫力、Thanksgiving の家族の温かさを体験することで、学びだけでは得られない貴重な経験を積むことができました。

冬の季節に入り、屋外での活動は減ってしまいますが、室内での文化体験や学びの機会も多くあるので、引き続き積極的に参加し、日々の学びを深めていきたいと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu